

中上 健次 存 村
柄谷 行人 在 上
坂本 龍一 の 龍
浅田 彰 耐 対
河合 軍雄 え 談
運實 重彦 か 集
庵野 秀明 た
奥村 康 き
渡部 直己 サ
妙木 浩之 ル
黒沼 克史 状
小山 鉄郎

柄谷行人 在 上

坂本龍一 の 龍

浅田 彰 耐 対

河合隼雄 え 談

蓮實重彦 が 集

庵野秀明 た

奥村 康 き

渡部直己 サ

妙木浩之 ル

黒沼克史 サ

小山鉄郎

村上龍（むらかみ・りゅう）

1952年、長崎県佐世保市生まれ。
武蔵野美術大学中退。大学在学中の76年に『限りなく透明に近いブルー』で群像新人賞、第75回芥川賞を受賞。その後も話題作を次々と発表し続けている。著書に『コインロッカー・ベイビーズ』『トバース』『五分後の世界』『ヒュウガ・ウィルス』『KYOKO』『ラブ&ポップ トバースII』『イン・ザ・ミソスープ』などがある。また、『トバース』『KYOKO』などで映画監督。99年3月にはメール配信サービスを使った、新しいメディアの実験『週刊「Japan Mail Media」』を創刊。金融経済を中心に扱って、新しい概念の創出と定着を目指している。

「Japan Mail Media」

<http://www.agey.co.jp/JMM/>

村上龍対談集 存在の耐えがたきサルサ

平成十一年六月 十日 第一刷発行
平成十一年六月二十五日 第二刷発行

定価はカバーに表示してあります

著者 村上龍

発行者 和田宏

発行所 鐵文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三ノ二十三
郵便番号 102-8008

電話東京 〇三六五三三二（大代表）

印刷所 大日本印刷

製本所 加藤製本

© Ryu Murakami 1999

万一、乱丁落丁の場合は送料当方負担でお取替えいたします。小社営業部宛お送り下さい。

存
在
の
耐
え
が
た
き
サ
ル
サ

目
次

存在の耐えがたきサルサ

キューバ エイズ 六〇年代 映画 文芸雑誌

『五分後の世界』をめぐって 日本は本土決戦、をすべきだった

映画とモダニズム

ウイルスと文学

描写こそ国家的捕獲性から自由たりうる

国家・家族・身体

ヴァーチャルな恋愛と鎖国化のシステム

残酷な視線を獲得するために

女子高生と文学の危機 なぜ「援助交際」を小説にしたか

何処にも行けない

心の闇と戦争の夢

日本崩壊

あとがき

7	中上健次
55	柄谷行人
89	小山鉄郎
125	浅田 彰
165	奥村 康
195	渡部直己
227	柄谷行人
275	坂本龍一
303	蓮實重彦
355	黒沼克史
381	庵野秀明
411	河合隼雄
449	妙木浩之
476	

装画——村上 龍

ブックデザイン——鈴木成一デザイン室

存
在
の
耐
え
が
た
き
サ
ル
サ

中上健次 存在の耐えがたきサルサ

1946年和歌山県生まれ。新宮高校卒業。「文芸首都」同人となり、小説に志す。「十九歳の地図」「浄徳寺ツアー」等の作品を発表。76年、故郷熊野の風土を背景に、自らの複雑な家族関係、血の葛藤を描いた「岬」で芥川賞を受賞。著書に「水の女」「枯木灘」「鳳仙花」「千年の愉楽」「奇蹟」「日輪の翼」「讃歌」「輕蔑」など。92年8月逝去。

まずクラシックから

村上 中上さん、ブランデンブルク協奏曲みたいな小説を書きたいってどこかでおっしゃってなかったですか。そういうブランデンブルクみたいな感じで書きたいというのは何となくわかるんだけど、わからない人もいると思うんです。

中上 ちょっと説明すると、たぶん村上龍なんかにもあると思うんだけど、最初に自分がどんな形の音楽で傷を受けたかみたいなの、それが原因しているんだと思うね。こういう俺だけど、子供のとき、最初から浪花節とか演歌というぐあいに見えてるけど、ほんとにはガキの頃からクラシックがすごく好きだった。

村上 あ、そう。

中上 熱狂しててさ。その兆候は小学校のあたりから始まったけど、すごくきれいな音楽だと思って熱狂して。で、中学なんかになると、たまたまその中学は、歌のうまいやつだけピクアップしたり、音楽的に勘のいいやつだけピクアップしたりして合唱部なんかつくられて、そこに入れられたってことがあるし。

村上 合唱部に入ったんですか（笑）。

中上 うん。特に新宮しんぐうなんていう俺の田舎は、古いんだよ。

村上 知ってますよ。

中上 行つたよな。

村上 行きました。

中上 そこで昔の旧制中学とか、ああいう時代の教育があったんですけどね。中学のときなんか、ものすごく古い音楽をかけて勉強したりしてきた。それで俺は中学、高校というのはほとんどクラシック、オペラ、それから教会音楽とか、そういうものに熱狂してたわけね。

村上 ヘエーッ。

中上 で、中学のときに、中学校の音楽の先生が運搬車みたいな自転車であつたところに来てくれて、「この子は音楽の才能があるから、東京の音楽高校へ入れろ」と言われた。そうやって一所懸命来てくれたんだけど、おふくろは土建屋の女房でしょ。それまでも、俺がラジオ——ラジオしかないけどさ——でオペラとかクラシックを聴いていると、ブツツと切るんだ、親が。いつも切られる。「聴くな、こんな音楽は」って。

村上 どういうんだろ。軟弱になるということ？

中上 というより、変態だと思ってる（笑）。だから、わけわからない音楽をやっているということ。

村上 怖いのかな。

中上 だから恐らく、子供が自分の理解から全然違うところに行っちゃう、それで怖い、まさに変態だという、そういうイメージで、「だめだ」とブツツと切っちゃう。

おふくろは文盲だから字の読み書きができない。だから本を読んでいると、読むと死んじゃう、ノイローゼになって、何か考えて死んじゃうからやめろって。「本を読むな」「音楽を聴くな」と。だから、いまの情操教育とか、そういうことを考えているお母さん方と全然違う教育を受けた。俺は苦しんでたよね。おふくろは学校の先生にそう言われて、「冗談じゃない。とつとと帰れ」って、塩を撒ぎかねない勢いで帰したんだよね。

だけど、普通の高校に入って、それでも音楽はやっていたんだけどさ。コーラス、クラシック、オペラ、教会音楽、そういうことと関わったんだけどね。学校では聴いたりするけど、家では全然聴けないわけ。それをどこかで隠して抑え込むしかない。

そういうものが最初に傷みたいにあるから、「何か物を書きたいな」って、人間の感受性の一等原初の部分とか、優しい部分というのを文章に入れて書きたいと思うと、そういうふうに音楽というのは出てくるんだよね。だから俺は登場人物を形づくる上で、どうしてもそんなふうな音楽は要るなと思って、それをフィッツとあそこで出した。

村上 あ、そうか。そういうクラシックとの関わり合いみたいなのは、教養じゃないものね。むしろ秘密の貝みたいなもの。

中上 秘密なんだね。で、君はどうだったの。クラシックというのはあった？

村上 佐世保は都会じゃないですけど、家はいわゆる教育者の家庭で、「本を読め」っていうふうだったから。

中上 逆だね（笑）。

村上 たとえばクラシックはもちろん学校でも聴くし、僕もきれいだなと思いましたよ。シュー

マンとかさ。でも、やっぱり子供っていうのは禁じられたものをやりたがるじゃないですか。そうするとどうしてもポップスとかね。やっぱり米兵も多かったし。僕が一番ドキッとして、鳥肌立ったような感じのやつというのは、やっぱりビートルズです。小学校六年のときに、「ブリーズ・ブリーズ・ミー」を聴いて、何か子供心に違うと思うんですよね。

ビートルズと中上さんのクラシックとは違うけど、直接的に聴いたわけじゃないし、これを聴くと豊かになるとかじゃないけど、子供がそういうのに入るとするのは非常に大事な気がする。そういうときに自分の中で起こったわけのわからない、「これは何だろう」っていうのはやっぱり書くときに文学になつていくような気がするんですよ。そこで全部わかつていっちゃう人というのは、書かなくてもいいわけでしょ。これは何かすごいんだけど、整理がつかなくて何だろうという、中上さんは「傷」と言ったけど、僕なんかは刻みつけられたような気がするんですよ。それがビートルズで、その後はずっとロックを聴いていましたけど。

中上 君と対談したとき、君が二十四歳で、俺が三十歳かそのあたりで、何しろ僕の一回後に芥川賞をもらったんだ。それで、もう前だったよねえ、僕らが会ったのは。

村上 最初に寿司食ったのは「群像」のときです。

中上 そうだよな。それで齡下の作家が出てきたって、ものすごくうれしかったんだけど、ただやっぱり、「俺と違うなあ」っていうことをいっぱい感じたんだけどさ。

ということとは、俺は最初にクラシック体験があつて、君の場合はロックがボンといきなりくるじゃない。僕はむしろ村上龍に会ってからビートルズを聴いたんだ。それまでは、「ビートルズなんて……」っていうあれで、恐らくその最初の対談のとき、君はビートルズとか言つてて、俺

は鼻で笑っているような感じだったんだけど、その後、俺はビートルズを聴いたんだよ。三十幾つになってビートルズを聴いたんだけど、「ああ、確かにこれは大したもんだ」と。

僕らからいうと、要するに、ビートルズをクラシックの目で見るとか、そういう意識で和音をどう使っているかとか、コードをどんなふうに使っているかとかいうのを見て、「あ、これは大したもんだ」って。だから聴いてて、「あ、村上龍はこれで『すごい』と言ったのか。それはそうだろう。これだけきちとしたクラシックの教養を持っているやつなんていうのはそういないなあ」と、俺は後で納得したんだけどさ。

時代だね。君と僕との六つの差は、僕が中学一年のときには君は小学一年生というぐらいだね。俺と姉の距離がそうだよ。この時代の六歳の時代差というのは、最初に出つくわす風景が全然違うんだよね。

僕の場合、音楽でいうと、最初に出つくわしたのがヨーロッパで、君のはアメリカでダイレクトにあって、そういうものと日本の土壌みたいなものをどうしても意識せざるを得ないというか、それがぶつかったというね。その時代も面白かったし、村上龍が出てきて、最初の『限りなく透明に近いブルー』の場合、「ああ、新しい世代が本当に始まったんだな」と思ったもん。それは自分を含めて。

僕はなんでそう思ったかという、自分は音楽家になりたかったということなんだね。君の『限りなく透明に近いブルー』を読んで、村上龍という人間に会って、「あ、そうか」という、いろいろな発見があったんだけどさ。ということは、前の世代は、イメージを形づくるのに、絵画的に全部形づくるんだよね。それは僕はだいぶ前の対談でも言ったね。

たとえば白樺派なんていうのはみんな絵を描く人だよ。みんな暇なときには絵を描いて、絵に對して造詣が深いとか、そういうものが条件だと思うんだけどさ。ところが、われわれはむしろ音楽だよ。で、六歳違えば持っているものは違うんだけど、たとえばクラシックだったり、あるいはクラシックとジャズだったりするんだけど、君はロックとジャズだとか、そういう違いになるんだけど。

村上 僕もクラシックは結構好きですよ。

中上 あ、そう。

村上 ええ。僕はいい意味で言ってもらっている「野蛮」だから、教養的には絶対何もできないですからね。それは中上さんも僕と同じじゃないですか（笑）。だれかに言われましたよ、「僕はこうですが……」「いや、中上も同じだ」って。そういうのって、一種の才能ですよ。教養的には聴かないというので。

僕はね、不思議に中上さんと何かが違うとは思わなかったですよ、お会いしてからもずっと。いまでも思わないけど。中上さんが最初に切り開いたものを俺が継承していると思っていて、いま何だかんだといって文学をくろうとしている人のことはどうだっていいんだけど、僕が最後みたいに使われているんだよね。古井さんがいてね……。

中上 その前は、俺が最後だよ（笑）。

村上 そうか、そうか。そういうええそうですね。中上さんは最後と言われてたもんね（笑）。

中上 われわれはこういうぐあいに言い換えたらいいよ、つまり「才能があるやつはそうざらにいない」と。俺は自分で自分を才能があると思うよ。才能があるというのは、同時に、一人で煩